

「日本におけるアリスの受容史 さまざまなメディアをとおして」
パラマウント映画『不思議の國のアリス』

木下信一

Shinichi KINOSHITA

1. パラマウント映画 *Alice in Wonderland*

Alice in Wonderland

1933年12月に米国で公開。

監督 Norman MacLeod 主演 Charlotte Henry

『不思議の國のアリス』

昭和9年3月25日 大阪松竹座封切

字幕翻訳：清水俊二

2. 清水俊二

昭和6年～8年まで渡米、ニューヨークに滞在。帰国後、日本パラマウント社員として字幕翻訳に携わる。

『新映画』昭和9年3月号「春の大作紹介 不思議の國のアリス」(清水筆)における証言

- ・ 1932年のキャロル生誕百年祭に招かれたアリスについての言及
「ダッチスは死んでしまつたけれど、アリス・リデルはまだ生きてゐる。昨年の春、彼女が紐育に來たとき、僕も紐育にゐたので、新聞で寫眞を見たが、品のいいまるまると太つた婆さんであつた」 おそらく日本では唯一、アリス渡米時の同時代の証言
- ・ 原作のフロイト的解釈について言及
「まつたく、不思議の國のアリス」(原文ママ)を一讀して、これは精神病者が書いたのではないかと言つた人があるのも無理はない。フロイトの精神分析などで『不思議の國のアリス』を分析したならば、必ず面白い結果が現はれるだらうと思ふ」
A.M.E. Goldschmidt "Alice in Wonderland Psychoanalysed"が発表されたのは1933年。同時期に同じ発想。
- ・ 原作・1932年の舞台上演・映画版の比較
Eva Le Gallienne 演出によるNYでのミュージカル上演を實際に観ている。その上で映画と比較。
「僕は一九三二年の十二月に紐育で上演されたイヴァ・ル・ギャリアンヌの『不思議の國のアリス』を見た」
「ギャリアンヌの『不思議の國のアリス』はギャリアンヌと、門下のフロリダ・フ

リーバスとが苦力して色脚（原文ママ）したものであるが、映畫に脚色したジョセフマンキウヰツとウヰリアムキャメロン・メンジスも芝居の脚色を踏襲してゐる」「映畫の脚色は、前述の通り、芝居の脇本を殆どそのまま書き直してゐる」

・ 楠山訳『アリス』への言及

「しかし、かんじんの原著リュイス・キャロルの『不思議の國のアリス』は読んでゐない。ただ、楠山正雄氏譯の邦譯で讀んだだけである」

「原作の『不思議の國のアリス』は、第一部「不思議の國のアリス」と第二部「鏡の裏の世界」の二部に分かれてゐる」 おそらく楠山による合本『アリスの夢』（「不思議の國」「鏡のうら」）を受けて、第一部、第二部という解釈をしたと考えられる。

・ 日本ではほとんど讀まれていないことを証言

「英國の子供は聖書の次に『不思議の國のアリス』を讀むといはれてゐる。……だから、歐米人は、芝居を見ないうちから、出場人物も事件も物語もことごとく知つてゐる。……しかし、日本人に對してはその狙いは當らない。『不思議の國のアリス』は日本ではそんなに讀まれてゐない。日本人の多くはまつたくの白紙で映畫に向ふわけである。……それほど有名な『不思議の國のアリス』と（原文ママ）いつたいどんな本か。これは當然起つてくる疑問だ」

「だから、くれぐれも原作を讀まれんことをおすすめしたいのである」

3. 映画訳題の変遷

『キネマ旬報』昭和8年11月1日号「海外通信」

「ノーマン・マクロード氏は「お伽の國のアリス」"Alice in Wonderland"の監督を始めた。……」

同11月11日号「海外通信」

「前號所報の「お伽の國のアリス」には……」

同11月21日号シャーロット・ヘンリーの写真へのキャプション

「パラマウント映畫「お伽の國のアリス」で主人公のアリスを勤めます」

同昭和9年1月1日号

『不思議の國のアリス』の題で広告。この号では「新春ポートレート」の冒頭をシャーロット・ヘンリー演じるアリスが飾っている。

以降の号はすべて『不思議の國のアリス』

『映画と演藝』第11巻第1号（昭和9年）

『鏡の中のアリス』で紹介。

同第3号（昭和9年）

『不思議の國のアリス』と題が変更される。

